

優秀賞論文要旨

ジェンダーステレオタイプは 環境・教育によって変えられるか

広 永 千 晴

世界ではジェンダー格差が小さくなりつつある中で、日本のジェンダー格差は依然として大きく、2021年3月に、世界経済フォーラムが発表した「ジェンダーギャップ指数2021」では、世界156か国中、日本は120位であった。また、この数値は、G7の中で圧倒的に最下位である（朝日新聞，2021）。日本においてジェンダー格差が大きい理由として、今もまだ根強いジェンダーステレオタイプの存在があげられる。

ステレオタイプの社会で育つと、その状況を当然のこととして認識するため、ステレオタイプに疑問を持ちにくい、現在のような日本社会でも、ジェンダー平等を志向する人々も少なくない。機会や資源の分配で、不利益を被りがちな女性の方が男性よりも平等志向であり、加えて、学歴が高いほどジェンダー平等志向性が高いことも示されている（鈴木，2017）。つまり、大学等での教育を通じてステレオタイプから逃れられる可能性を示している。本研究の目的は、人々のジェンダーステレオタイプを解消し、ジェンダー平等な社会を実現するために、現状でもジェンダー平等主義的な思考を育んできた人が受けてきた教育や家庭環境（父親の家事状況）を調査し、大学教育の効果を検討することであった。

調査では、回答者の学年、大学でのジェンダー講演の受講の有無、ジェンダーの授業受講歴、高校の形態（女子高，共学）、父親の家事分担状況について尋ねるとともに、ジェンダー観を測定した。ジェンダー観の測定方法として

は、伊藤（1997）の性差観スケールなどがよく使用されるが、本尺度の質問項目には問題が多い。例えば、「女が人前でタバコを吸うのは好ましくない」という項目に対して、「そう思う」と答えた人が、男性なら人前でタバコを吸ってもよいと考えているジェンダーステレオタイプの人なのか、あるいは、タバコの有害性を考慮して、男女ともにタバコを人前で吸うこと自体がよくないと考える人（ステレオタイプ的ではない人）なのか判別できない。そこで、本研究では、このようなステレオタイプの測定に不向きな項目については除外しつつ伊藤（1997）の尺度を参考にし、また、苦米地（2009）のジェンダー観の項目も利用し、筆者自身が考えた項目も追加してジェンダー観尺度を作成した。ジェンダー観得点の範囲は21～84点であり、点数が高いほどステレオタイプのであり、点数が低いほどジェンダー平等主義的であることを示す。

女子大学生を調査対象とし、80名から有効回答を得た。ジェンダー観得点の平均値（SD）は46.8（±9.76）であり、正規分布を示した。高校の形態や父親の家事分担状況によるジェンダー観の違いは見られなかった。一方、学年については、上級生のほうが、下級生よりもジェンダー平等主義的であることが示された。また、ジェンダーの講演参加歴がある人のほうがない人よりもジェンダー平等主義的思考をもつ傾向があること、ジェンダーの授業受講歴がある人のほうがない人よりも、ジェンダー平等主義的思考をもつ傾向があることが示された。ジェンダーの授業を受講したことがある人の中では、ジェンダーの授業を受けた数が多いほど、ジェンダー平等主義的思考になる傾向が見られた。もともとジェンダー不平等な社会に疑問を持っていた人が大学でジェンダー関連の授業や講演を積極的に受けているという可能性も否定できないが、大学でジェンダー関連の講演や授業を受けることにより、男女不平等な社会に疑問を持ち、ジェンダー平等主義的思考になるという可能性も考えられる。

このことから、ステレオタイプの社会の中で、ジェンダー平等主義的な思考を育むために、大学教育が有効である可能性が示された。調査対象の大学においては、ジェンダーに関する授業が多く開講されているが、受講せずに卒業してしまう学生も多い。女性がおかれている現状を、学生が正しく理解するた

めに、ジェンダーの授業を必修にするのがよいと考える。ジェンダーの授業を通して、男女不平等である日本の現状を正しく知ることにより、女子大学生のジェンダーステレオタイプを解消することができるようになると考えられる。

